

アンドレ・ヴィオリスのグラン・ルポルタージュ： 極東関連の調査を中心に

真野, 倫平
南山大学外国語学部：教授

<https://doi.org/10.15017/7329817>

出版情報：Stella. 43, pp.251-265, 2024-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de
l' Université du Kyushu
バージョン：
権利関係：



アンドレ・ヴィオリスのグラン・ルポルタージュ^{＊)}

——極東関連の調査を中心に——

真 野 倫 平

アンドレ・ヴィオリス（1870-1950）は20世紀前半に活躍したフランスの作家、ジャーナリストである。当時のジャーナリズムで活躍した数少ない女性のひとりであり、とりわけ1920年代から30年代にかけてグラン・リポーターとして世界を駆けめぐり数多くのルポルタージュを刊行した。彼女の記事はしばしば明確な政治的主張を持ち、社会主義・自由思想・フェミニズムの立場から社会を批判した。また日本人にとっては、当時の日本および極東情勢に関連するルポルタージュを数冊執筆している点でも興味深い。

ヴィオリスは20世紀前半の最も重要な女性ジャーナリストのひとりと見なされるが、研究はフランスでもあまり進んでいない。当時の有名ジャーナリストの例に洩れず、著作の大半は今日絶版となっている。しかし今世紀に入り、アンヌ・ルヌーによる伝記研究とアリス＝アンヌ・ジャンデルによるルポルタージュ研究という2冊の研究書が刊行され、研究の基礎が整いつつある¹⁾。また日本でも『日本とその帝国』（1933）が2020年、『1932年の大日本帝国 あるフランス人記者の記録』として大橋尚泰により翻訳された²⁾。

ルヌーが「女性ジャーナリストはいまだに歴史を持たない」³⁾と述べるように、女性ジャーナリストの歴史はジャーナリズム史のなかでもとりわけ等閑視された領域だった。しかし近年のジェンダー研究の進展、さらには「現実についての文学」⁴⁾の再評価の動きにともない、ヴィオリスの仕事は再び注目を集めているように見える。彼女が残したグラン・ルポルタージュを分析し、それを同時代の他のジャーナリストの仕事と比較することで、彼女が20世紀のジャーナリズム史において果たした役割を解明することができるだろう。本稿では特に日本に関連する3冊の著書を取りあげ、ヴィオリスの日本に対する見解とその叙述スタイルの特徴を明らかにしたい。

ヴィオリスの経歴

ヴィオリスの経歴については前述のルヌーの伝記が最も詳細であるが、前掲

『1932年の大日本帝国』の大橋尚泰の訳者解説にも概略が述べられている。彼女は1870年に県知事の娘として裕福な家庭に生まれ、高度な教育を受けた。1890年にバカロレアを取得後、イギリスのオックスフォード大学に留学し、社会主義・自由思想・フェミニズムの洗礼を受け、さらに帰国後はソルボンヌ大学で文学を学んだ。1895年、ギュスターヴ・テリーと結婚、地方で教職に就いた夫とのあいだに2人の娘をもうけたが、地方での生活に飽き足らず、マルグリット・デュランが社主を務めるフェミニズム紙『フロンド』に接触し、本格的な記者活動を開始する。1901年にギュスターヴと離婚、1905年に作家・中国研究家のアンリ・ダルデンヌ・ド・ティザク（筆名ジャン・ヴィオリス）と再婚し、娘2人を授かる。1913年に小説『クリケ』を刊行し高い評価を得た。第一次大戦中は看護師やイギリス特派員、戦後はイギリスの新聞の在仏駐在員を務めた。1922年以降は『プチ・パリジャン』紙に活動の中心を移し、並行して『エコー・ド・パリ』紙、『エクセルシオール』紙などにも寄稿、1924年にはジャーナリスト組合の運営委員を務めている。

1920年代から30年代にかけては『プチ・パリジャン』紙のグラン・リポーターとして世界各地で取材を行う。1926年にソヴィエトに調査旅行に赴き、『ロシアで女ひとり』（1927）を刊行。また、フランスに返還されて間もないアルザス・ロレーヌ地方を調査し、『アルザスとロレーヌ 情熱を超えて』（1928）を出版した。その後はアジア方面に関心を向け、1929年にアフガニスタン、1930年にインドで取材を行い、その成果は『イギリスに抗うインド』『アフガニスタンの動乱』（1930）として纏められた。

1931年には植民地相ポール・レノーに従ってフランス領インドシナを視察、フランスによる植民地支配を調査。その成果は『エスプリ』誌に「インドシナについての覚書」として掲載され、さらに1935年にはアンドレ・マルローの序文を付して『インドシナ SOS』（1935）として刊行される。インドシナからさらに極東に向かい、中国および日本を調査し、その成果は『上海と中国の運命』（1933）、『日本とその帝国』（1933）、『内面の日本』（1934）として纏められた。

1930年代にヨーロッパで右傾化が進み、イタリアとドイツでファシズムが台頭すると、ヴィオリスは左派の知識人に接近し、1934年に「反ファシズム知識人監視委員会」（CVIA）に参加。1935年にジャン・ゲーノの支持を得て人民戦

線の機関紙『ヴァンドルディ』の編集部に入り、スペイン内戦にかんする記事を掲載、同紙が1938年に廃刊になると、ルイ・アラゴンが創刊した共産党の日刊紙『ス・ソワール』の編集部に加わった。また、フランス保護領のチュニジアで調査を行い、『われらがチュニジア』（1939）を刊行している。

1939年に第二次大戦が勃発、フランスがドイツの占領下に置かれると、ヴィオリスはリヨンさらにデュルフィに移住し、レジスタンス運動に関与。地下活動ゆえに詳細は不明だが、地下新聞に別名で小説『クリスティーナ女王の秘密』を連載、また匿名でヒトラー政権を批判するパンフレット『ヒトラーの人種主義』（1943）を執筆する（1944年に記名で刊行）。戦後には最後のグラン・ルポルタージュとなる『南アフリカ』（1948）を刊行。核兵器禁止を求めるストックホルム・アピール（1950）に賛同するなど晩年まで政治的関心を失わなかったが、1950年に79歳で死去した。

ルヌーはヴィオリスの50年にわたるジャーナリスト歴を「職業」「情熱」「義務」という3つの時期に分け、それを伝記の3部構成の表題にしている⁵⁾。すなわち、第一に『フロンド』紙でジャーナリストを自らの「職業」に選んだ時期。第二に第一次大戦を契機にルポルタージュへの「情熱」に目覚め、グラン・リポーターとしての才能を開花させた時期。第三に1933年以降、世界の監視を自らの「義務」として政治闘争に深く加担した時期である。ヴィオリスは早くから明確な政治的主張を持ち、社会主義・自由思想・フェミニズムの立場から発信を行ったが、そのアンガジュマンは時代とともに深まっていったと言える。そのことは人民戦線や共産党など左派政党との協力関係や、反ファシズム運動とレジスタンス活動への関与にも確認できる。

ヴィオリスはまた、オックスフォードとソルボンヌに学び、英語を完璧にあやつるなど、当時の女性としては例外的な高学歴と、同時代の男性グラン・リポーターに比べてもはるかに豊かな教養を備えていた⁶⁾。メディア史研究者のマルク・マルタンによれば、この時代の女性リポーターは数こそ少ないが、上流階級出身で高い教養を持つ者が多いという――

これらの女性はいずれも、大戦前には稀なことに中等以上の輝かしい学歴を持っていた。アンドレ・ヴィオリスはオックスフォードを修了し、娘のシモーン・テリーはセーヴルの高等師範学校卒で文学の教授資格を持っていた。男性同業者の大半と異なり、誰もがひとつ、あるいは幾つかの外国語を話した。ヴィオリスは完璧な英語を話

し、終戦直後に『デイリー・メール』紙や『タイムズ』紙に記事を書いた。[…]

これらの女性が、ときに冷笑や敵意をもって迎えられると予想されるこの業界に飛び込むには、自信や熱意や並外れた大胆さが必要だった。それによって彼女らは男性同業者の評価を獲得した。アルベール・ロンドルは上海を発つ前に、アンドレ・ヴィオリスを病院に見舞った。しかし彼女らにはさらに家族に縛られない自立が必要だった。アンドレ・ヴィオリスとティタイナは離婚によってこの自由を手に入れた。前者が第2の夫、後者がパートナーを選んださいには、相手が自分の職業の重要性に口を挟むことを許さなかった。⁷⁾

このことは、当時のジャーナリズムが完全な男性社会であり、女性が参入するには相当のアドバンテージが必要だったことを示している。ヴィオリスの場合は自身の並外れた教養と、2人の夫がいずれもジャーナリズムに関わっていたという状況が追い風になったと言えるだろう。

グラン・ルポルタージュの業績

ヴィオリスの業績は小説から政治的パンフレットまで幅広いが、ここでは特に『ロシアで女ひとり』から『南アフリカ』にいたる10冊のグラン・ルポルタージュに注目したい。彼女がグラン・リポーターとして活動したのはキャリアの後半で、『ロシアで女ひとり』の刊行時にすでに50代後半になっていた。10冊のうち8冊が1920年代後半から30年代前半にかけて集中的に刊行されているが、この時期はアルベール・ロンドルが活躍した（そして不運な死を遂げた）時代であり、ルポルタージュがジャーナリズムの最重要ジャンルとして認知された時代でもあった。もちろん上記の10冊以外にも単行本化されていない記事がたくさんあり、たとえばスペイン内戦やズデーテン併合にかんする記事も忘れてはならない。

前述のジャンルはヴィオリスが好んでとりあげた主題として、①植民地問題、②中日紛争、③スペイン内戦とヨーロッパ危機の3つを挙げている⁸⁾。本稿ではこの中から第2の日本に関連したルポルタージュ、すなわち極東旅行の直後に刊行された『上海と中国の運命』『日本とその帝国』『内面の日本』の3冊と、1938年に行われた講演「中日紛争」をとりあげる。

1. 『上海と中国の運命』（1933）

本書は、ヴィオリスが香港に向かうトンキン号のデッキにたたずむところか

ら始まる⁹⁾。彼女は香港に上陸し、中国人街を散策する（第1章）。さらに広州へ列車で移動し、沙面の租界へ向かう（第2章）。そこは1911年の辛亥革命の記憶の眠る街である（第二次広州起義）。日本の脅威を前にして、中国人の国民感情は高まりつつあった。

ヴィオリスは続いて上海に到着した。上海は国際租界とフランス租界が存在する巨大な国際都市だが、日本軍の接近に動揺が広がっていた（第3章）。さらに南京に移動し、貧しい街中を人力車で走行中に住民の投石を受け、彼らの外国人に対する憎悪を実感する（第4章）。再び上海に戻ると、日本人街にある日本軍の兵営の前で兵士たちが訓練を行うのを目撃し、そのことで日本軍の青年将校に尋問を受ける（第5章）――

私は彼らの後を追おうとした。しかしこのとき、日本の若い中尉が数人の兵士を従えて私の方へやってきた。人通りのない通りで私はほほひとりきりだった。彼は英語で私に不愛想に尋ねた。「あなたは何の権利でここにおり、何をしているのか」。

「私の仕事を」と私は答え、説明した。

彼は怒りで蒼くなった。

「許可は取ったのか？」

「何のために？ ここは国際租界でしょう。日本のものだというのが？」¹⁰⁾

ここではリポーター自身が単なる観察者でなく当事者のひとりとなることで、小説の一場面のような雰囲気を生み出している。ジャーナリズム文学研究者のマリー＝エヴ・テランティは、この時代の女性グラン・リポーターの叙述スタイルの特徴として、①一人称の使用、②「他者」としての役割、③小説的文体の3点を挙げているが¹¹⁾、ここにはそのすべてが認められる（リポーターの一人称的視点、軍事訓練への女性の闖入、ドラマチックな叙述）。日本人将校の尊大さと女性リポーターの非力さの対比が緊張感をさらに高めている。

記述はさらに、閘北区の市街戦（第6章）、前外務大臣へのインタビュー（第7章）、戦闘の続き（第8章）へと続く。しかし本書のクライマックスはそれに続く戦闘後の惨状の描写であろう（第9章）。ヴィオリスは閘北区の戦いの廃墟を見学したのち、日中両軍の激戦地だった江湾村（人口1万人の小村）を訪れた。中国軍の塹壕の跡を覗き込んだ彼女は、そこに打ち捨てられた中国兵の死体の山を目にして愕然とする。さらに彼方に目をやると、そこにも山積みされたものがあつた。それは中国兵とは対照的に、丁寧に洗われ整然と安置された

日本兵の死体だった——

しかし私の連れは何をしているのか？ 私より先に頂上に着き、黙って身じろぎもせず塹壕をのぞき込んでいる。私は彼らに合流した。私ものぞき込んだが、最初は毛布や衣服が散乱しているのしか見えなかった。突然、私は理解した。この黒ずんだ傾げた首、突き出された黒い握りこぶし、ヘルメットの下に埋もれた顔、乾いた血のついた褐色の蠟人形、このこわばった足……。なんと、これは死者たちだ！ 塹壕の端から端まで、何キロにもわたって、死者でいっぱいなのだ！ よじれ、重なり、ねじ曲がり、すでに大地の一部になり、やがて土に吞み込まれ草で覆われるだろう。奇妙なことにこれらの哀れな死体は本物に見えなかった。まるでどこかのおぞましい蠟人形館の人形のようにだった。

喉が渇き、心臓は波打ち、私は向こうの木々の茂る丘の方へ目をそらした。おや、マッチ箱のマッチのようにきちんと並べられ積み重ねられた、あのカーキ色の長い物体は何だろう？ まさか？ でもそうだ。きれいに洗われ拭われ、最後の閲兵式のために手足をきちんと並べられているが、やはり死者たちだ。これらの哀れな日本兵は、私の足下の塹壕に積み重なる不幸な中国兵と同じく、死んでいるのだ。驚くことがあろうか？ これが戦争だ。でもどうして風がこんなに穏やかで、空がこれほど明るく、夕日が地平線でこれほど優しく輝いているのだろうか？¹²⁾

ヴィオリスはここでも目に映る光景や頭に浮かぶ思念の流れのままに描くことで、きわめて主観的な叙述を物している。最後に描かれる穏やかな風景が逆に精神的な動揺をきわだたせるのも高度に文学的な手法と言えよう。

記述はさらに、日本軍大敗の誤報（第10章）、交渉の経緯（第11章）へと続く。この上海事変は日本に対する国際社会の評価を一変することになった（第12章）。あれほど急速に近代化をなしとげた日本は、なぜ突然に野蛮な国に変わってしまったのか。日本の首都の方針と陸海軍の行動の矛盾を探るためヴィオリスが日本に向けて出発するところで本書は閉じられる¹³⁾。

2. 『日本とその帝国』（1933）

本書はヴィオリスが上海事変の取材後に上海から船で横浜に向かうところから始まる（第1章）。彼女の印象では、日本人の感情表現はあまりに抑制されており、その真意を窺うことは容易でない——「あの人たちは理解できない、絶対に理解できるわけがない。[…] あの人たちが見せているのは、顔ではなく仮面なのだわ」¹⁴⁾。日本人は理解不可能だという考えは、この後も繰り返し強調されることになる。東京に着いたヴィオリスは上海事変に対する日本人の考えを探

ろうとするが、上海で目撃したような愛国的熱狂を見出すことはできなかった（第2章）。しかし満州事変については国民全体が一致して支持しているように見える（第3章）。彼女は陸軍大臣の荒木貞夫や、イギリス滞在歴のある大学教授、その友人の代議士にインタビューを試みた。そこには、知識人の抵抗も虚しく、軍部の先導により社会全体がファシズムに飲み込まれてゆく過程が浮かび上がる。

ヴィオリスの分析によれば、その背景には軍部（士族）の不満の増大があった（第5章）。日清戦争、日露戦争、第一次大戦のあと、欧米列強の反対もあり、日本は軍部が払った犠牲に見合うだけの成果を獲得できなかった。そこから文民政府に対する軍部の不満が鬱積する。さらに1921年のワシントン会議、1930年のロンドン海軍軍縮会議が日本の軍備に制約をかけたことで、不満は国民全体に広がり、ナショナリズム運動が爆発的に生じたのだ――

こうした軍部の苦渋や欲望のほかにも、国家主義運動が存在し、発展する理由はいくつもある。日本で構想・実現されてきた議会制度によって抱かされた失望。60年前から日本が（愛国主義者の断言するところによると）だまされてきた、ヨーロッパの思想や文明に対する不信任感。古きよき日本の、純粋にアジア的な理想への回帰。下層階級だけではなく、とりわけ中流階級、プチブルジョワ、知識人を容赦なく襲った経済不況。巨大な財閥が掻きたてる憎悪。工場労働者に対する時代おくれの搾取をとりしめる労働法の不在。そして最後に、地方の困窮。こうした、一見すると矛盾し、相反するようにみえるさまざまな不満の原因がすべてあわさって、巨大な力となり、そこに強烈で攻撃的な愛国感情が入りこんで、活気づいているのだ。¹⁵⁾

こうして日本国内において軍部の支配が確立された（第6章）。ヴィオリスは1932年2月から3月にかけての血盟団事件（右翼団体による要人暗殺事件）について裁判所で取材を行ったさい、担当判事が暗殺者に共感を表明したことに驚愕し、日本社会の右傾化に強い警戒感を覚えている（第7章）。そのようなナショナリズムの風潮のなかで日本の議会主義は民衆の支持を失い（第8章）、軍部が天皇の権威を借りて強大な権力を握るにいたった（第9-11章）。

ヴィオリスは、三・一五事件（1928年の日本共産党員に対する一斉検挙事件）の裁判を取材したさい、三山一輝という人物と再会する¹⁶⁾（第12章）。この人物はかつてフランスの労働会議に参加した左派の学生だったが、現在は国家主義団体で書記を務めているという。早くから社会主義に親しんだヴィオリスに

とって、社会主義者とファシストの接近というのは理解しがたい現象だった。彼女は両者の関係をさらに探るべく、一方で社会民衆党・日本国家社会党・全国労農大衆党などのプロレタリア政党を訪問し（第13章）、他方で大日本国粋会・大日本生産党・行地社・立憲養成会・国本社などのファシズム団体取材する（第14章）。これらの調査は彼女のライターとしての取材力の高さを遺憾なく示している。またヴィオリスは国本社の平沼騏一郎会長を取材したさい、この尊大な政治家の自分への対応が女性への敬意を欠いていたと指摘している——「私がお客さんなのに。しかし、これは古くからの日本の、女性には厳しい礼儀作法によるものなのだ」¹⁷⁾。彼女がフェミニストとして、日本の家父長制と政治的ファシズムの密接な関係を見抜いていたことが窺われる。

ヴィオリスは続いて日本社会の分析に移り、産業の危機（第15章）、経済における財閥（三井・三菱）の支配（第16章）、労働者の置かれた悲惨な状況（第17章）、農民の貧困（第18章）などを論じる。これらの章では日本の政治経済についての理知的な分析が印象に残る。

1932年、五・一五事件が勃発し、犬養毅首相が青年将校の凶弾に倒れた（第20章）。事件取材したヴィオリスは、犬養首相の葬儀が驚くほど寂しいものだったと証言する——「気の毒な犬養総理の葬式は、信じられないような大衆からの無関心と、はじめて西洋から来日した者なら啞然とせずにはいられない、感情を表にださない遠慮がちな沈黙した雰囲気の中かでとりおこなわれた」¹⁸⁾。彼女は青年将校を擁護する世論の高まりと、犬養首相の葬儀に対する大衆の無関心を伝えているが、これはその後の日本の歩みを示唆する重要な証言である。本書はヴィオリスが不安を胸に抱いて日本を去るところで閉じられる（第21章）。

3. 『内面の日本』（1934）

ヴィオリスは『日本とその帝国』に続けて『内面の日本』を刊行した。前者が主に政治面に焦点を当てているのに対し、後者はそれ以外の文化や風俗にかんする観察を集めたものである。それらは政治取材の副産物にすぎなかったが、日本について無知な読者のために公表を勧められ、刊行にいたったという（緒言）。しかし本書には先の2冊以上に、彼女の日本人に対する率直な感情が表れているように思われる。

扱われる題材は、帝国ホテル（第1章）、銀座通り（第2章）、日本の家庭（第3-4章）、食文化（第5章）、演劇（第6章）、芸者（第7章）、新しい娯楽（第8章）、浅草（第9章）、自然への愛（第10章）と多岐にわたる。全体からひとつの主題を抜き出すことは困難だが、ヴィオリスが概して日本の伝統文化を哀惜し、社会の近代化を批判していることが窺われる――

しばしばその前に、会社の晩餐や、会社の経営者が社員のために開催する饗宴が行われる。こうした宴会ほど陰気なものはない。紹介の複雑な儀式のあと、会食者たちはこの上なく礼儀正しく、ヨーロッパ風の完璧な衣装に身を包み、花で飾られた食卓を囲んで着席する。背筋を伸ばし、機械的な微笑を常に口元に浮かべ、肘を体につけたまま、フォークやナイフを慎重に扱う。ナイフとフォークを間違えないよう、西洋のマナーに反しないように注意し、簡単な応答以外では決して咀嚼を止めない。[…]
日本人の仮面の上に張りついた微笑は、深遠なアイロニーを隠しているのではないだろうか。

分かるものか、と言われそうだ。しかし驚いてはいけな。上流階級の日本人が西洋風の流儀を学び、完璧で冷徹な礼儀をよそおうほど、堅苦しくなりわれわれから遠ざかってゆく。本当のことだ。陽気で思いのままにふるまう庶民の方が、われわれにはよほど身近に感じられる。¹⁹⁾

ヴィオリスはさらに、当時日本人の美德として高く評価されていた「道徳性」「礼儀正しさ」「清潔さ」について、それぞれ一章を割いて批判を加えている（第11-13章）。日本に対する政治的反感からか、彼女の日本人評価はしばしば辛辣かつ断定的であり、そこにはヨーロッパ人の日本に対する好意的態度を改めさせようとする意図も透けて見える。

後半では、日本の抱える問題として、若者と女性に焦点が当てられる。まず日本の若者と教育の問題（第14-17章）。ヴィオリスによれば、日本では近代化とともに義務教育が敷かれ、識字率も高い。しかしそれはよき市民、よき兵士を作るためであり、生徒にはもっぱら規律と自己犠牲の精神がたたき込まれる。高等教育になるほど統制は厳しくなり、若者からは表情が失われる。大学生は学費と生活費の高さに苦しみ、アルバイトに疲弊している。兵役の負担や学業の重圧に押しつぶされ、自殺する若者も多い。

次に日本人女性の問題（第18-21章）。ヴィオリスはまず、街中で見かけた日本人女性の醜さに強い失望を覚えたと言告白する――

東京に上陸するやいなや、私は路上の光景に最初の失望を覚えた。路上でも店内でも、あらゆる階層の女性たちが、木のサンダルを履き身をかがめて速足で歩いていた。〔…〕

美しさはほとんど、あるいはまったくなかった。通りで整った顔に出会うことは稀だった。スタイルの整った身体はさらに稀だった。背は低く、たいてい背中を丸め、鈍重な体つきで、脚は常に短く不格好で、鼻は低く唇は厚いので、ほとんどの日本人女性は色っぽい表情と優雅な態度でそれを補うしかない。²⁰⁾

彼女はさらに友人の日本人画家の言葉を引用し、自らの判断を正当化する——「しかし銀座ですれちがう女性たちを見ると、ヨーロッパやアメリカの美質を得ることなく、われわれの民族の美質を失ってしまったように思うのです」²¹⁾。ここでもヴィオリスの日本人女性への評価は辛辣であり、そこにはともすればヨーロッパ人としての優越感や異民族に対する軽侮さえ窺われる²²⁾。

それでもヴィオリスはフェミニストとして、日本人女性の権利を支援することを忘れなかった。彼女は日本人女性が男性に支配され独立した人格を認められていないことを問題視する——「彼女らはさらに、3つの服従を教えられる。娘にして父に従い、妻にして夫と義父母に従い、未亡人となって長男あるいは親族の男性に従うのだ」²³⁾。日本の女子教育を調査するため、彼女は大阪府女子師範学校を訪問し、生徒たちにインタビューを行った。生徒たちは最初は優等生的に回答していたが、やがて率直な本音を露わにする——「でも全然結婚したくない。〔…〕女性は結婚したら自由じゃなくなるから」²⁴⁾。日本にもフェミニズム運動は存在するが、ナショナリズムが台頭する近年は激しい弾圧を受けている。ヴィオリスは1930年に設立された婦人同志会を訪問し、日本のフェミニストが置かれた逆境を取材する。

最終章（第22章）でヴィオリスは、日本の急激な近代化が伝統との断絶を招き、日本国内に分裂と軋轢を生み出したと結論する——「日本が西洋の思想と科学技術をわがものにするために60年かけて達成した見事な努力は、新世代の知識人に古き伝統に対する感覚と敬意を失わせた」²⁵⁾。その結果、日本はファシズム独裁に陥り、世界に対する脅威と化すにいたった——そのような警告で本書は閉じられる。

4. 「中日紛争」(1938)

「中日紛争」は、ヴィオリスが1938年12月1日にソルボンヌ大学で極東情勢

について行った講演の記録である。冒頭で彼女は「覇権をめざす帝国主義の文明世界に対する戦後最初の挑戦が中国で投げられた」²⁶⁾と述べ、中日紛争を文明と非文明の戦いという明快な図式に当てはめる。それに続く紛争の記述は上記3冊のルポルタージュと重複する点が多いが、日本の暴力性と中国の平和主義の対比が一段と強調されている。たとえば日本軍は「恐るべき鋼鉄の自動人形であるロボット」、中国は孔子の哲学を継承する「きわめて平和的な」国として描かれる²⁷⁾。ヴィオリスは上海事変の中国兵をスペイン内戦の義勇兵になぞらえることで、中国への強い共感を表明する――

スペインの勇敢な義勇兵、同じ理想のもとに蜂起した知識人や工場労働者や農民たちは、装備も規律も優れた正規軍の攻撃に対し、同じようにその場しのぎで共和国の防衛を行った。彼らを前にして、私は幾度、小さな黄色い兵士と彼らの犠牲を思い出したことか！²⁸⁾

第二次国共合作（1937）により共産党と国民党が手を結んだいま、ソヴィエトの支援もあり、中国軍は強固な結束を獲得した。最後にヴィオリスは、戦争を終わらせる契機として、中国軍の勝利、日本の知識階級と労働者による革命、そして全世界の労働者による革命を待ち望むと宣言する――「あるいは〔…〕、いつでもどこでもあれらの戦争の犠牲者であるプロレタリアの大衆が、すべての国で立ち上がり、こう叫ぶかもしれない。《もうたくさんだ、終わりだ》」²⁹⁾。

かくのごとく本講演では日中両国に対する善悪の評価がきわめて明快で、日本に対する政治的反感が一段と深まっている。またソヴィエトに対する肯定的評価や、労働者への革命の呼びかけなど、社会主義のイデオロギーをそのまま反映した部分も少なくない。その意味でヴィオリスの左派寄りの姿勢が上記3冊のルポルタージュよりも直截に示されていると言える。

ヴィオリスの叙述スタイル

以上がヴィオリスの日本に関連するルポルタージュの概要である。1930年代初頭のヨーロッパでは、イタリアでファシスト党が政権に就き、ドイツでナチスが台頭しつつあった。ヴィオリスは極東での調査を通じて、日本における軍事独裁の進行に強い危機感を抱いた。同じ時期、日本に好意的だったアルバー・ロンドルも、上海事変を機に日本に厳しい目を向けるようになった。ロンドル以上に左派寄りだったヴィオリスが、日本の右傾化に激しい反発を示すの

は当然と言える。それを踏まえたうえで、彼女の叙述スタイルの特徴を2点指摘しておきたい。

第一に、自らの政治的理念を明確に示したこと。ヴィオリスは若い頃から左派に共感を持ち、組合活動や政治活動に積極的に関与した。ルポルタージュにおいても客観的な観察に努めるだけでなく、個人的な意見を表明することをためらわなかった。ジャンデルによれば、ヴィオリスのアンガジュマンは、たとえば同僚だったロンドルに比べて（時代の違いという要因はあるにせよ）はるかに一貫したものだった³⁰⁾——

ジェラルディーン・ミュルマンが示すように、アルベール・ロンドルはアンガジュマンの権利よりも、あらゆるアンガジュマンから自由でいる権利を擁護した。アンドレ・ヴィオリスとは反対に、彼はひとつのルポルタージュのあいだ戦いを続けると、すぐさま別の戦場へ旅立った。とはいえ、ロンドルが1932年、つまりヒトラーが権力の座に就き、ヨーロッパ危機が急激に展開し、世論が過激化する1年前に死んだということは強調しておきたい。比較するならば、この時代にアンドレ・ヴィオリスは共産主義に接近し、アンリ・ペローは極左から極右へ移ったのである。³¹⁾

日本に関連するルポルタージュにおいても、ヴィオリスは自らの政治的反感を隠すことなく、日本人にことさら辛辣な評価を下しているように見える。またジャンデルのこの説明は、1938年の講演で彼女の左派寄りの姿勢が以前より明確化したこととも合致する。それは彼女自身の思想が先鋭化したというよりも、当時の政治状況が中立的態度を許さなくなった結果なのである。

第二に、フェミニストとしての姿勢を貫いたこと。ヴィオリスはどのルポルタージュにおいても常に女性問題に強い関心を示した。重要なのは、彼女の取材活動そのものが男性社会に対する異議申し立てとなっている点である。たとえば日本軍の青年将校やファシズム団体の指導者とのやりとりにおいては、男性が支配する空間への女性リポーターの闖入それ自体が、家父長的ヒエラルキーの攪乱を意味している。その点でヴィオリスのフェミニズムは、イデオロギーの表明とは別の次元で、グラン・リポーターとしてのアイデンティティの内に組み込まれていたと言える。前述のテランティは、女性グラン・リポーターの特徴のひとつとして「他者として」の役割を挙げている——

他者として。世界各地を移動するこれらの女性ジャーナリストは、フロンドウズの共感する身体を再活用した。ルポルタージュはしばしば原住民の群れに入りこむこ

とを重んじる。[…] アンドレ・ヴィオリスはどのルポルタージュにおいても、まず原住民のなかを歩きまわった。

こうした実践は、フィールドへ接近する形式を正当化し、女性は無害だという思い込みや女性と庶民が同等であることを利用するもので、力強く効果的な描写を可能にする。こうした実践の違反性と危険性を、たとえ明示されなくても、読者ははっきりと感じとる。

フロンドゥーズは、こうした没入が最終的にルポルタージュの主題との同一化に行きつくことを証明した。それはジャーナリズムという審級がほぼ消滅することであり、グラン・ルポルタージュにおいてもよく見られる同一化のジャーナリズムの実践である。³²⁾

すなわち、女性ジャーナリストは普段から男性社会のなかで周縁的な位置にある点で、植民地原住民と類似した立場にあり、それゆえに原住民社会への接近が容易になるということだ。たしかに大阪の女子師範学校の取材においてもヴィオリスは女生徒から率直な本音を引き出すことに成功していた。またすでに見たように、彼女は日本人女性に対してときに辛辣な意見を述べながら、それでも彼女らの権利を支援するのをやめようとはしなかった。要するに、政治的反感から来る否定的評価も、彼女のグラン・リポーターのアイデンティティに組み込まれたフェミニストとしての基本的姿勢を揺るがすにはいたらなかったと言えるだろう。

註

- *）本稿は JSPS 科研費・課題番号 24K03782 ならびに 2024 年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2 の助成を受けた研究成果の一部である。
- 1) Voir Anne RENOULT, *Andrée Viollis : une femme journaliste*, Angers : Presses de l'Université d'Angers, 2004 ; Alice-Anne JEANDEL, *Andrée Viollis : Une femme grand reporter. Une écriture de l'événement 1927-1939*, Paris : L'Harmattan, 2006.
- 2) アンドレ・ヴィオリス『1932 年の大日本帝国 あるフランス人記者の記録』（大橋尚泰訳）、草思社、2020 年を参照。
- 3) RENOULT, *op. cit.*, p. 11.
- 4) 「現実についての文学」とは、伝記・自伝・回想録・旅行記・証言・ルポルタージュなど、現実に基づく著作の総体を指す。たとえばイヴアン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である 社会科学のためのマニフェスト』（拙訳）、名古屋大学出版会、2018 年、8-10 頁を参照。
- 5) Voir RENOULT, *op. cit.*, p. 14.

- 6) たとえばアルベール・ロンドルはヴィシーの商人、アンリ・ペローはリヨンのパン職人の家庭の出身である。
- 7) Marc MARTIN, *Les grands reporters. Les débuts du journalisme moderne*, Paris : Louis Audibert, 2005, pp. 295-296.
- 8) Voir JEANDEL, *op. cit.*, pp. 65-93.
- 9) 冒頭でリポーター自身の姿を示すのは、アルベール・ロンドルをはじめとする当時のルポルタージュの常套手段である。
- 10) Andrée VIOLLIS, *Changhai et le destin de la Chine*, Paris : Éd. R.-A. Corrêa, 1933, pp. 136-137.
- 11) Voir Marie-Ève THÉRENTY, *Femmes de presse, femmes de lettres. De Delphine de Girardin à Florence Aubenas*, Paris : CNRS Éditions, 2019, pp. 347-357.
- 12) VIOLLIS, *Changhai et le destin de la Chine*, *op. cit.*, pp. 202-204.
- 13) ヴィオリスは上海での取材中に病気で入院し、同じく上海に滞在中のアルベール・ロンドルが彼女を病院に見舞った。直後にロンドルは定期便で上海を発ち、フランスへ向かう途上で船舶火災により死亡した。本書の注にはロンドルの最期にかんする言及がある (voir *ibid.*, p. 245, note)。
- 14) VIOLLIS, *Le Japon et son empire*, Paris : Éd. Bernard Grasset, coll. «Les Écrits», 1933, p. 6. 引用は大橋訳前掲書 23 頁による。
- 15) *Ibid.*, pp. 57-58. 引用は大橋訳前掲書 68-69 頁による。
- 16) 原文では «Ikki Miyama» とあり、漢字表記は大橋訳前掲書に従う。
- 17) VIOLLIS, *Le Japon et son empire*, *op. cit.*, p. 170. 引用は大橋訳前掲書 160 頁による。
- 18) *Ibid.*, p. 240. 引用は大橋訳前掲書 215 頁による。
- 19) VIOLLIS, *Le Japon intime*, Paris : Fernand Aubier, 1934, pp. 18-19.
- 20) *Ibid.*, pp. 201-203.
- 21) *Ibid.*, pp. 203-204.
- 22) ヴィオリスの日本人に対する差別感情については『日本とその帝国』の訳者・大橋尚泰も指摘している。前掲書「解説」265-268 頁を参照。
- 23) VIOLLIS, *Le Japon intime*, *op. cit.*, p. 212.
- 24) *Ibid.*, p. 216.
- 25) *Ibid.*, p. 245.
- 26) VIOLLIS, «Le Conflit sino-japonais», *Cahiers du Cercle Descartes*, n° 7, Marcel Maupoint, 1938, pp. 5-6.
- 27) *Ibid.*, p. 11.
- 28) *Ibid.*, p. 12.
- 29) *Ibid.*, p. 28.
- 30) 両者の性格の相違は他の点にも窺われる。たとえばロンドルが党派的な政治紙よりも中立的な情報紙を好んだのに対し、ヴィオリスは積極的に政治紙と関係を結んだ。あるいはロンドルがルポルタージュの主題を一作ごとに変えたのに対し、ヴィオリ

スは常に政治問題を中心に置いた。ロンドルのルポルタージュの特徴については、拙著『アルベール・ロンドル 闘うリポーターの肖像』、水声社、2023年、272-278頁を参照されたい。

- 31) JEANDEL, *op. cit.*, p. 214. ミュルマンのロンドル解釈については以下を参照——Géraldine MUHLMANN, *Une Histoire politique du journalisme. XIX^e-XX^e siècle*, Paris : PUF, 2004, p. 164.
- 32) THÉRENTY, *op. cit.*, p. 350. 「フロンドウーズ」とはテランティが設定する女性ジャーナリストの類型のひとつで、家父長的権威への反抗者を指す。